



3. ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋 第2回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会報告

榎原圭子
同大会長、東洋大学社会学部

第2回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会は、「医療者におけるメンタリング」をテーマに開催されました。医療者にはプロフェッショナルとしての技術や能力に加え、他者との良い協働のためのチームワークやリーダーシップなどの汎用的能力が求められています。こうした能力を開発する方法の一つがメンタリングです。

メンタリングとは、職業人および人間としての成長・発達を促すための継続的な支援です。メンタリングは近年日本でも積極的に取り入れる組織が増えており、医療現場でも広がりつつあります。

本学術集会では、医学教育におけるメンタリングに造詣の深い日米の専門家をお招きし、それぞれの実践知や文化的特徴、これまでの先行研究を踏まえた上で、より良いメンタリングを提供するための方略を議論しました。当日の演題と概要は以下の通りです。

第一演者：榎原圭子（東洋大学社会学部）「メンタリングとは何か—定義とその効用」

第二演者：Richard Toshiharu Kasuya (University of Hawaii, John A. Burns School of Medicine)

「Practical tips for mentors and mentees」

第三演者：尾原晴雄（沖縄県立中部病院）「日本の医学教育においてメンタリングをどのように活用するか？

—卒後教育での実践と先行研究から—」

榎原からは、メンタリングは一對一の上下関係によるものから、階層に関わらない複数間のネットワークに変化していること、メンタリングは昇進・昇給、職務満足感などのワークキャリアだけでなく、ワークライフバランス、精神健康、人生満足感など、ライフキャリアにも効用をもたらすことをお話ししました。

Kasuya 先生からは、良いメンターの3つの資質（支援的態度、忍耐力、人望の厚さ）、メンターとメンティの間に強い関係性を築くためのポイント、そしてメンターにとってのコーチングスキルの重要性についてお話しいただきました。

尾原先生からは、日本の医療現場におけるメンタリングは、若い医療者の専門家としての成長を促す制度として導入されていること、今後は医療者としてだけでなく、個人として充実した人生を歩むための支援関係（≒本物のメンタリング）に発展することが期待される、ということをお話しいただきました。

メンタリングは欧米ではよく知られた概念であり、ワークとライフの両方を豊かにする資源であると捉えられています。日本の医療現場においても、制度として導入されたメンタリングが、今後、本物のメンタリングになるように、本学会も発信を続けていきたいと思っております。